

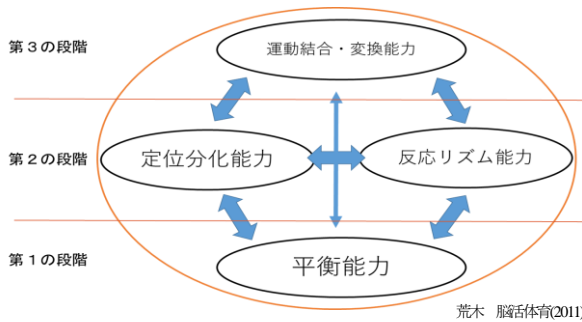
平成 28 年度教職大学院派遣研修報告書

派遣者番号	管 28K03	氏 名	與那覇 早苗
研究主題 —副主題—	学校教育へのコーディネーショントレーニング導入に関する課題と展望 —小学校における同僚との実践と省察を通して—		
派遣先	創価大学教職大学院	担当教官	吉川 成司 長島 明純
所属校	港区立高輪台小学校	校長	篠原 敦子

キーワード： コーディネーショントレーニング メンター 学習ポートフォリオ

1 研究の背景と目的

① コーディネーショントレーニングとは
コーディネーショントレーニング
(CO-ordination Training 以下 COT と表記) とは、「人間の能力を全体として捉え直すという手法で、『体力』を『技術・技能』と区別することなく、一つの能力として見ていく、そして身体も精神も一つの能力として開発していくという考え方」(荒木, 2014) である。コーディネーション能力の構造図は、大きく三つの段階と四つの能力群に区別される。



荒木 脳活体育(2011)

(図1) コーディネーション能力の構造

② 東京都の施策との関連

「総合的な子供の基礎体力向上方策(第2次推進計画)」(2013(平成25)年)の施策の一つとして都内公立校に導入され、実験校10校から始まった。「アクティブプラン to 2020」(2016(平成28)年)では、「COTの成果を当該区市町村内等に普及する地域拠点校を定め、実践内容を地域に発信していくことが必要である。」とし50校を指定。更に拡大に向けた優れた実践の普及に努めることが示されている。しかし、理論や実践の理解が容易ではないため拡大の困難さと、検証方法が確立されていないため長期的な効果検証の研究の必要性を挙げている。

③ 研修受講者の課題意識との関連

平成27、28年度に東京都の教員を対象にしたCOTの研修が実施されている。受講した367名の教員の意識調査アンケート結果から多くの教員が、COTを「校内の課題解決に役立てたい」「課題解決に有効である」と考えていること、自己のスキルアップに加え「校内で組織的に活用したい」と考えていること

が分かった。

上記①～③の背景とともに、筆者が感じる子供たちの身のこなしのぎこちなさ、他者やものとの距離感がうまくつかめない子供の姿に対する課題意識を解決するため、COTの実践を通して、心と体を一体として捉えた指導の在り方、学校教育への導入について明らかにすることを本研究の目的とする。

2 研究の方法・内容

研究方法は、アクション・リサーチを参考にした。対象は、都内小学校第2学年28名と学級担任とし、COTのプログラムを朝の時間を使ったオリエンテーションと体育科の体づくり運動の領域で実践し、収集した以下のデータを分析し、考察をした。

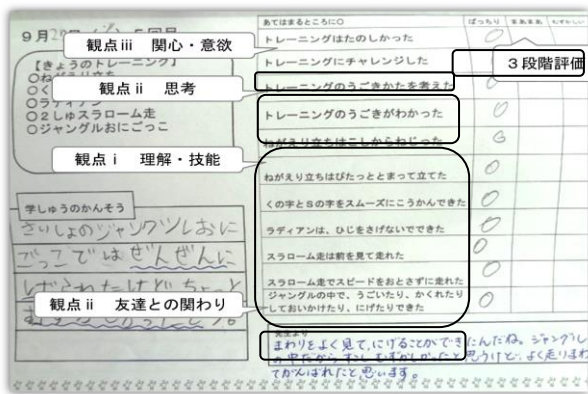
- ・学習ポートフォリオ
- ・体力調査の6月の結果との比較(一部)
- ・筆者と担任の協働的省察と担任への事後インタビュー

(表1) トレーニングの活動内容

分	1回目	分	2回目	分	3回目	分	4回目	分	5回目
10	準備運動 オリエンテーション	5	準備運動	5	準備運動	5	準備運動	5	準備運動
20	微返り立ち クローリング 「くの字」運動 「Sの字」運動 ラディアンI型	10	クローリング 「くの字」運動 「Sの字」運動 ラディアンI型 ラディアンII型	10	く-Sの転換 ラディアンI型 ラディアンII型 クローリング	5	く-Sの転換 ラディアン転換	5	く-Sの転換 ラディアン転換
		10	バウンドキャッチ	10	平行バス	15	平行バス 2種スラローム走	10	2種スラローム走
10	ボール渡しゲーム	15	ボール渡しゲーム	15	三すくみ鬼ごっこ	15	三すくみ鬼ごっこ	20	ジャングル鬼ごっこ
5	整理運動 振り返り	5	整理運動 振り返り	5	整理運動 振り返り	5	整理運動 振り返り	5	整理運動 振り返り

トレーニングの内容は、平衡系、定位分化系、反応リズム系、運動結合・変換系が組み合わされ、活動時間の配分を徐々に第3段階の運動結合・変換系トレーニングが長くなるように計画した。

学習ポートフォリオは、観点別自己評価と自由記述のフォーマットを作成し、観点は新学習指導要領の審議のまとめ「評価の観点の在り方」で示された、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点を参考に、観点i「理解と技能」、観点ii「思考力や友達との関わり」、観点iii「運動に対する関心」とした。それを、児童が3段階で自己評価した数値を平均化した。



(図2) 学習ポートフォリオ

3 研究の結果と考察

観点別の自己評価の推移を見てみると、観点ii、観点iiiでは回数を重ねるごとに上昇し、ずれはない。観点iは、上昇しているが、理解(分かった)と技能(できた)にずれが生じる。自由記述に「感覚はつかめたけどあっているか不安」とあり、学習者が説明を聞き、手本を見て頭では分かっても、身体の動きにつなげ「できた」と実感するのにずれが出るのは予想される。COTは、「できる」ことよりも「刺激を与える」ことを目的とするが、ずれが生じる点に留意し、学習者が「できた」と実感できる配慮が必要である。また自由記述で、得意な運動以外の動きができない、一般的に運動が苦手な児童の自己肯定感の低さを表す記述があった。そこで、指導中の前向きな賞賛の言葉や、動きの変化を見とった声掛けをするなど指導を工夫した。その結果、トレーニングに対する前向きな態度と記述が変わっていった。このように学習ポートフォリオは、指導の効果を確かめたり、指導内容を工夫したりするために、有効に活用することが可能である。

COT指導前の6月と指導後の9月の体力調査結果を比較すると、男子は、反復横跳びとソフトボール投げに伸びが見られた。女子は、長座体前屈とソフトボール投げに伸びが見られた。

(表2) 体力調査結果の比較

男子平均	6月	9月	差
長座体前屈(cm)	24.1	23.9	△0.3
反復横跳び(回)	29.4	32.8	3.4
50m走(秒)	10.6	10.6	0
ソフトボール投げ(m)	10.4	13.6	3.1
女子平均	6月	9月	差
長座体前屈(cm)	32.8	33.5	0.8
反復横跳び(回)	30.8	30.7	△0.1
50m走(秒)	10.5	10.4	△0.1
ソフトボール投げ(m)	7.8	9.2	1.4

人数で見ると、ソフトボール投げの記録を男子は16人中15人、女子は12人中9人伸ばしていることが分かった。「COTの効果」との断定はできないが、四つの能力群を高めていくと、体力向上面での課題に対する改善の可能性があるのでないだろうか。

協働的省察データの整理分析では、COTを具体的

に展開するための取組の方向性が浮き彫りになってきた。それは、メンターとしての役割、誰でも実践できる内容、評価の在り方である。また、学級担任のトレーニングの特性によって発揮された児童の能力への気付きや、学級経営と関連付けた指導など、指導の力量を高めていきたいという“学ぶ教師”の姿が見えてきた。事後インタビューでは、COTの理論は理解できるが、効果については納得不十分であったこと、導入には柔軟に対応できる可能性はあるが、メンターとしての役割をもつ同僚の存在を必要としていることが明らかになった。

4 今後の展望

今回の研究は、短期的な検証に留まっているため、COTに十分な効果があるとは言い難い。東京都教育委員会が課題として挙げているように、長期的な効果検証は必要であろう。しかし、学校教育への導入に関しては次の三つの方法を提案する。

① 研修した内容の柔軟な実践方法

COTは、原始的な動きが多く、運動経験の差異は多少影響するとしても、高度で専門的な技術は必要ない。平衡系トレーニングの「く・Sの字」「ラディアン」では、JACOT(NPO法人日本コーディネーショントレーニング協会)作成の音源を使用するが、太鼓やタンバリンなどで指導者がリズムを刻み指導することも可能である。導入時間も、体育科の「体づくり運動」やその他の運動領域の補助的な運動として取り入れたり、特別支援教育の自立活動に取り入れたりするなど柔軟な展開が可能である。

② 指導に活かせる評価方法

学習ポートフォリオは、運動を得意とする児童、運動に消極的な児童に対しても指導の工夫改善に役立てることができた。観点別自己評価項目は、各運動のポイントを表記し低学年でも容易に記述可能で、指導者にとっても指導のポイント、見取るポイントとなる。さらに、発達段階に合わせアレンジし、活用していくことができる。

③ メンターの育成方法

現在各校に教本が1冊配布されているが、活用に結び付いているとは言い難い。校内にメンターとしての役割を担う同僚の存在が必要である。メンターを育成するために、50校の地域拠点校が、研修だけではなく、②で提案したような評価方法や、組織的な活用の事例など、成果の共有ができると継続した学びのサイクルが構築されていくと考える。COTの研修後に継続したサポート体制があると拠点校がメンターを育成する場としての役割も担っていけるのではないだろうか。

